

小さな写真展の開催に至るまで

平成18年度
地域づくり人養成講座受講者
礎建築工房
越智 保緒



私の郷土、今治で好きなところの一つに海があります。美しい色、激しい潮流、魚介類のおいしさ、巨大な盆栽かのような多島美。しかし、その海に最近、ショックな出来事がありました。新聞の記事で目にしたのですが、海岸から硫化水素が検出され、夏休み中、子供達が泳げなくなっているということでした。海がだんだん汚れていき、水温の上昇で生態バランスがくずれ見慣れない魚が増え「なにかおかしい」ということを感じていたのは私だけではないと思います。ひょっとしたら近い将来泳げない海、魚が捕れない海になってしまうのではないかという思いを抱きました。このような郷土の現状を友人とこのままでいいのか、しかし何も出来ることがないとよくぼやいていました。

そんなおり、私達は、えひめ地域政策研究センターが主催している地域づくり人養成講座に参加していて、実際に地域を良くしようと活動しているところを訪問し、地元の人たちとワークショップを行い意見交換をする体験をさせていただきました。活動を継続していくためには、資金繰りのこととか、後継者のこと、周りからの批判などさまざまな壁があるのだなということを知りました。それでも、地域のことを思い諸問題を抱えつつも、少しでも前に進もうとしている行動に心打たれました。自分にできることは本当に何も無いのだろうか。この講座を通じて、いつからか、自分に問を発していたように思います。

こう気持ちが揺れ動いているさなか、友人の



村上太君(カメラマン)が、明治から昭和初期のころの今治の写真を保存している愛好家の人たちを何人が知っているというので、それだったら貸してもらえるかどうか分からないが、お願いをして廻って、それを集めて写真展を開催してみようという話もちあがりました。開発や汚染を非難するのではなく、自分たちが暮らすこの町のことをいま一度思考するきっかけを与えることができるのではないか。おじいちゃんおばあちゃんがお孫さんに話しかけている場面や、友人同士、家族が集まって写真の前でそれぞれの想いをそれぞれの言葉で会話している風景が脳裏に浮かびました。これなら自分達にもできるかもしれないと思いました。



展示写真 昭和20年代今治港付近

景が脳裏に浮かびました。これなら自分達にもできるかもしれないと思いました。

それから、すぐ行動に移しました。準備は案の定大変でしたが、色々な人達に助けをいただき無事開催することができました。主催者側からの告知は全く出来なかったのですが、テレビ、ラジオ、雑誌等の出演依頼があつたりして、会場のテキスト

ポート今治にはたくさんの方々が足を運んで下さって、写真の前でそれこそ同窓会のような雰囲気談笑のひとときを過しておられました。

この写真展を開催したからといって何かが変わったわけでもないですし、ただの自己満足で終えてしまっているかもしれません。しかし、私達には会場の空気から、地域の潜在力・底力みたいなものを感じることができました。微力ながら何かが変わるきっかけになれるよう継続していきたいと思っています。